

今回の ASCO 参加の目的は、JACCRO のもと多施設共同で行った切除不能膵癌に対する臨床試験の結果を発表することである。幸いにも、当都立駒込病院に発表する機会をいただき、発表代表者の化学療法科の小室泰司先生に同行することとなった。

私にとっては、ASCO 参加は初めての経験である。世界中から、この年次大会を目指して集まるわけで、果たしてどんな規模なのか、どんな新しい知見が得られるのか興味津々であった。学会は6月3日から7日までであったが、私たちの勤務上の都合もあり、6月4日に出発、6月7日早朝には帰途につくという強行日程となった。

学会場のシカゴの McCormick Place は、広大であり、中にフードコート、ギフトショップもあって、実に快適に過ごすことができる。私は、参加者の往来による混雑に驚かされたが、日本からも大勢の参加者が来ているはずであろうにあまり遭遇しなかった。これも、広さゆえと感じ入った。

私たちの発表は6日の午後のポスターディスカッションのセッションであった。同セッションでは、膵癌に関する発表もいくつか見られたが、耳目を集めるような内容は乏しい印象であった。私たちの内容は塩酸ゲムシタビン(GEM)単独療法と GEM+S-1 併用療法の無作為化比較第 II 相臨床試験の結果である。primary endpoint を objective response rate とし、secondary endpoint を overall survival、progression free survival などとしたものであるが、いずれにおいても併用療法が有意に良好である結果であった。これまでの膵癌の治験では、併用療法で GEM 単剤よりも有効であった報告はほとんど皆無であり、私たちの結果は大いに注目を集めることになった。300 以上用意したハンドアウトは瞬く間になくなった。一方、今回の ASCO では、やはり日本から、同様な試験でより大規模な study である GEST study の結果も翌7日に発表予定であった。しかし、その抄録からみるかぎり、併用療法の優位性は認められておらず、私たちの結果とはやや乖離があったため、その場では、日本の名だたるオンコロジストが次々と顔を出し、GEST study の結果との違いをふくめ熱い議論となった。ポスター会場での所定時間の掲示のあと、場を移し、ディスカッサントのコメントを受けたが、英語の聞き取りの理解も乏しかったせいもあるが、特別なコメントはなかったようで若干期待はずれではあった。

飛行機の便の関係で、翌日の GEST study の発表を聞くことができなかつたのは非常に残念であったが、私たちの JACCRO の成果が今後どのように評価されるのか、また、日本で膵癌治療の標準化学療法の方向性を巡る議論が沸騰しそうな気配に期待をいだきつつ帰国の途についた。